
合唱コンクール殺人事件

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

合唱コンクール殺人事件

【Nコード】

N1523Y

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

転入生の主人公は、転入早々、殺人事件に遭遇してしまう。その頃、合唱コンクールの時期で、合唱コンクールの時だけ噂になる“音楽室の怪”というのがあると同級生から聞く。なかなか事件のことが進展しない中、見兼ねた主人公は「事件を解決してやる」と警官に言ってしまう。警官との条件付きで、事件を解決に全力を尽くす。

一人の女子生徒の転入

十月が始まって第一週目の月曜日、午前八時半過ぎに一人の女子生徒が、学校の正門に立ち校舎のほうを見つめている。

朝のショートホームルームが始まるチャイムは、とつくに鳴り終わっている。しかし、その女子生徒は急ごうともせずに、希望に満ちた瞳を校舎に向けている。

（今日からボクが通う学校か。ボクのことを理解してくれる人物はいるのだろうか…？）

などと思いながら、ゆつくりと校舎の中へと進んでいく。

女子生徒は長い髪を後ろに束ね、少し長めの前髪は左斜めに流している。

濃紺のプレザーのポケットの中に手をつ込み、プレザーと同じ色のスカートはひだ下五cmの長いスカート。

プレザーの下に着ているブラウスの第一ボタンは開けているが、赤リボンはきっちり上までつけている。

女子生徒は転入してきて、今日が初日だ。

一年七組の教室の前まで来ると、大きく深呼吸して恐る恐る教室のドアを開けた。

クラスの一団が、女子生徒のほうに目を向ける。

「あら、やっと来てくれた。さあ、中に入って」

担任の河村江美が笑顔で迎え入れてくれる。

女子生徒が教室に入り、江美が黒板に女子生徒の名前を書き、前を向く。

「今日からみんなのクラスの一員になります。赤谷夏希さんです。みんな仲良くしてあげて下さい。赤谷さんの席は真ん中の前から四つ目」

江美が夏希の席のほうに目をやる。

夏希は返事をする、自分の席に着く。

「永井君、今日一日、赤谷さんに学校のことを教えてあげて」

「はい、わかりました」

江美の一言に、永井という少年が返事をした。

「ショートホームルームはここまで。一限目は移動教室だから移動してちょうだい」

そう言うと、江美は黒板に書いた夏希の名前を消した。

夏希がカバンの中の教科書やノートを机の中に入れていたところに、永井少年が夏希に近付いてきた。

「赤谷さん…？」

「あん…？」

「僕は永井和夫です。このクラスの学級委員長をしている。今日だけじゃなくて、慣れるまでもなんでも聞いてくれよ」

眼鏡をかけたインテリタイプの和夫は、笑顔で言ってくれる。

「あ、ああ…」

さすが、学級委員長の風格だな、と夏希が思っていたところに、

「なんか、今竹に感じが似てねー？」

二人の背後から、一人の明るい男子生徒の声が聞こえてきた。

「原口…」

「オレは原口仁。よろしくなっ！」

そう紹介した仁に、ウザったい目を向ける夏希。

「そんな目をするなよー。まっ、そういうところが今竹に似てるけどな」

「今竹って誰だよ？」

「アイツだよ。左一番前の隅に座っているショートヘアの女子。アイツは性同一性障害なんだ」

仁が教えてくれた女子を見る夏希。

（性同一性障害か…）

「とりあえず、移動教室だから行こうぜ！」

「そうだな。赤谷さん、行こう」

和夫の声に慌てて目を反らした夏希は、今竹というクラスメートの

ことが気になっていた。

そして、本人と仲良くなれたら…と夏希は思っていた。

その日の授業が終わり、放課後に夏希は和夫と仁の二人に校内を案内してもらうことになった。

体育館や食堂などゆつくりとした足取りで見て回る三人。

いつの間にか、ウザったく思っていた仁のことも、仲良くなってしまっていた夏希。

「コイツ、生徒会に入ってるんだぜ」

仁が和夫肘をつついて言う。

「へえ…」

目を丸くして和夫を見る夏希に、照れる様子もなく変わらない様子で歩く和夫。

「…ていつても、まだ役職はねーけどな。オレの学年で生徒会長は永井だつて言ってる奴多いしな」

「まだわからねーよ。他の役職、書記とかやりたいし…」

「でも、会長やるつもりだろ？」

「予定はな」

そう言くと、和夫は軽くため息をつく。

「ところで話変わるけど、赤谷さんて前の学校はどんな学校だったんだ？」

和夫は夏希に聞いてくる。

「やりたいことがやれる学校。制服もなかったし楽だった」

前の学校のことは聞かれたくもなかったし、答えたくもない夏希だったが、普通ならばなぜ転入してきたのか、という疑問がでてくるのは当たり前だと思って答えたのだ。

「つまり、単位制の学校ってことか…」

「うん。ボクは音楽のほうに進んでたんだ」

「音楽目指してるんだ？」

「まあな」

「ここが音楽室だ」

和夫は音楽室のドアをゆつくりと開けた。

壁にはベートーベンやモーツァルトの肖像画が貼られている。

黒板の前にはピアノが置いてあり、生徒が使用する机と椅子が並べられている。

「まあ、どこの学校にでもある音楽室だ」

「原口、“あの話”を赤谷さんにしてもいいよな？」

和夫は仁に意味ありげに聞く。

「いいんじゃないの？　いつかは耳にするだろうし…」

頷きながら同意する仁。

そんな二人の会話に、首を傾げる夏希。

「“あの話”ってなんなんだよ？」

「うん：この学校にはある噂があつてな」

和夫はゆつくりとした口調で話し始めた。

「ある噂って…？」

「音楽室の怪っていう噂。この話しは合唱コンの時期にしか噂にならないんだけど、今から七年前、歌の上手い女子生徒がいたんだ。その女子生徒は、ソプラノのソロを歌うことになっていた。しかし、合唱コンの二日前、心臓病で倒れて亡くなったんだ。それ以来、合唱コンの時期になると、その女子生徒の歌声が聞こえてくる、というものなんだ」

和夫は机に座り、夏希に教えてくれた。

「その話、本当なのか？」

「マジだって。オレの友達も何人が聞いている奴いるんだしな」

「その歌声ってのはいつ聞こえてくる？」

「放課後だ」

二人の話を聞くと、夏希は腕を組み考え込んだ。

（何かありそうだな）

「そんな深刻な顔するなって！ 今、この音楽室にいるんだし

大丈夫だよ」

仁は明るく夏希に言う。

「確かにそうだ。何も心配する必要はない」

「なんで合唱コンの時期だけなんだ？」

夏希は二人に質問する。

「毎年、合唱コンの時期にだけしか聞こえてこねーから。今年も先週からもう女子生徒の声が…」

「そっか…」

「でも、大体のことはわかるけどな」

和夫は意味深な発言をする。

「はっ？ どういうことだよ？」

「いいや。なんでもない」

首を横に降り、ピアノを見つめる和夫。

（コイツは何か知っている。知っていてわざと言わないんだ）

夏希は和夫を見つめて思っていた。

「そろそろ行こうぜ。生徒会室に行かないと…。もうすぐで会議なんだ」和夫はカバンを持ちながら言う。

時計は四時半を過ぎようとしている。

「会議ってなんだよ？」

「ヒミツだよ」

仁に笑顔で答える和夫。

「なんだよ、それ？」

二人は並んで歩き始める。

一階まで降りてくると、和夫と別れ、夏希と仁はバス停まで歩いて行くことになった。

仁とは駅まで一緒なのだ。

「原口！」

二人の背後から、若い男性の声がした。

「あ、ヤマテツじゃん！ 何してるんだ？」

「テニスコートの修理してたんだよ」

ヤマテツと呼ばれた教師はそう答えると、仁の隣にいる夏希に気付いた。

「なんだあ？ 彼女と一緒にか？」

「違うよ。オレのクラスの転入生だ」

「ああ…そういえば…」

「誰だよ？」

夏希は小さく仁に耳打ちする。

「山上哲平先生。オレのクラスの男子の体育を教えてもらってるんだ。みんな、“ヤマテツ”って呼んでるってわけ」

仁の説明に、本日二度めのウザったい目を哲平に向けた。

「ヨロシクな！ 君の名前は…？」

「赤谷夏希」

ウザったい言い方で自分の名前を告げる夏希。

「いい名前だ」

夏希のウザったい目も気にせずに接する哲平。

「オレは職員室戻るな。じゃあな！」

哲平は二人に手を振ると、校舎に戻っていく。

「なんか、ホストみたいじゃね？」

夏希はボソツと呟く。

「ホストっぽいけど人気あるんだぜ？ まあ、大学時代、本当に

ホストしてたみたいだけだな」

仁は苦笑しながら言った。

（ホストみたいじゃなくて、本当にホストだったんだな）

夏希はそう思っていた。

二人の初めてのコンタクト

夏希が転入してきて、あっという間に一週間が過ぎた。今の時期は、合唱コンクールで校内が練習一色である。

夏希のクラスは、学年の中で優勝候補で、課題曲も一つ上の学年の課題曲を歌うことになっている。

そして、一番最初の音楽の授業で、夏希のパートはアルトになった。夏希が気になっている今竹美夕も同じパートだ。

まだ美夕に声をかけられていないので、これを機に話してみようと思っているところなのだ。

「今から音楽か…。気が重い…」

音楽室へ向かう途中、仁がため息をつき言う。

夏希が転入してきて以来、仁と二人で行動を共にすることが多くなつた。

「武本先生って厳しくねーか？」

「合唱コンだけじゃない。普段の授業もあんなもんだ」

「ふーん…。まあ、熱血教師ってどこか？」

「熱血教師もいいとこだ。まだ若いのに…」

仁は音楽室のドアを開けながら言う。

二人が中にはいると、背広をきつちりとした男性が、夏希のクラスの課題曲の楽譜を見ている。

夏希のクラスの音楽を教えている武本雅哉だ。

二人はそそくさと席に着くと、静かに座ることにした。

それからすぐにチャイムが鳴り、パート練習をするように、と雅哉から指示があった。

アルトのパート練習場は、音楽準備室だ。

八人いるアルトは、まずMDに入っているアルトの音程と合わせて歌い、それからMDなしで歌うことにした。

しかし、夏希にとっては容易なことではない。

音楽の授業は、今日で三回目であり、まだ音程どころか歌詞も覚えていないのだ。

歌詞のコピーとMDに曲を入れてもらったが、まだまだなのである。「赤谷さん、どう？ 覚えられてる？」

パートリーダーが聞いてくる。

「う、うん…まあ、なんとか…」

そう笑ってごまかす夏希。

「この曲、難しいもんね。あと二週間で合唱コン始まるし、赤谷さんにとっては、転入してきて一番最初の行事だね」

次は別のアルトのメンバーが言う。

「ねえ、聞いてよ。私、昨日聞いたのよ」

突然、パートリーダーが声のトーンを落として言う。

「聞いたって…音楽室の怪？」

「うん。昨日の放課後、部活帰りに音楽室の前を通ったのよ。そして、ソプラノの声が…」

「まさか…。誰か練習してたんだって！」

パートリーダーの友達が笑いながら言う。

「私もそう思ったの。だけど、そつと音楽室の中を覗いてみたけど、誰がいる気配がなかったの」

パートリーダーの言葉に、夏希以外は顔色を変えた。

「じゃあ、例の女子生徒の歌声ってこと…？」

「多分…」

パートリーダーは思い出さくないという表情をした。

（…ったく、この学校は音楽室の怪の話ばかりだ）

内心、呆れ返る夏希。

夏希が転入してきて以来、音楽室の怪の話でもちきりなのだ。

アルトがそんな話をしていた時、音楽準備室の外がガヤガヤと争う声が聞こえてきた。

「なんだろう…？」

一人が音楽準備室のドアを開けた。

すると、和夫とクラス一のヤンキーの増田義隆が言い合いをしている。

「なんでオレが歌わねーといけね なんだよ？ オレは絶対に合唱コンなんて出ね からな！！」

義隆は和夫にそう吐き捨てるように言うと、椅子に座ってしまった。
「クラス全員で歌わないとこの曲は仕上がないんだ」

和夫は義隆に近付く。

「オレ一人いなくても大丈夫だって」

「いや、増田にも出て欲しいんだよ」

「なんで学級委員のお前に指図されねーといけねーんだ？ そり

ゃあ、お前は優秀だし誰でもお前の言うことは聞くよ。でも、オレはお前の言うことなんて聞かねーからなっ！」

義隆は腕組みをして、プイツと横を向いた。

和夫は義隆の言い方と態度に力チンときたのか、

「あのなあ……」

怒りを露にし、義隆の胸ぐらを掴んだ。

「オイッ！ やめろ！」

中に入ったのは雅哉だ。

「二人共、いい加減にしろ。とりあえず、練習再開だ。みんな、早くパート練習しろ！」

雅哉の声に、二人の言い合いを見ていた全員は、パート練習を再開する。

和夫は悔しそくに義隆の胸ぐらから手を離し、義隆は椅子に座ったまま練習をしようとはしない。

そんな二人の姿を見つめる夏希がいた。

「永井と増田、いつもあんな感じなんだよなあ…」

音楽の授業が終わった後、仁は教科書と楽譜、ふで箱を脇に抱え、いつものことだという口調で言う。

「あの二人、いつも衝動してんのか？」

「まあな。さつきみたいになちよつとしたことで、増田がグチったり文句ばかり言うもんだから、永井がなだめる。増田からすると、永井が言ったことが気に障るんだろうな。すぐにケンカ腰だ」

ため息まじりに答える仁。

「増田っていつからあんなだった？」

「あんな…って…？」

「不良っぽい格好してるんだっていう意味だよ」

「半年前の入学直後から。さすがに入学式は黒髪だったけど、二日後には茶髪だった。眉も細いし、言い方もすごいし、見た目もヤンキーだし、クラスの誰も友達になろうなんて奴いねーよ。一学期の中間テストの後には停学十日だ」

仁がそう言った後に教室についた二人は、それぞれの机に戻り、教科書などを置くと、仁が夏希の隣の席に座った。

「停学十日って何かしたのか？」

夏希は隣の席に座っている仁に美を乗り出して聞く。

「何かしたってわけじゃないんだけど、あの身なりでな。でも、未だにあのままの身なりのままさ」

「増田は増田なりの抵抗なんだろうな」

夏希は頬杖をついて遠い目をしながら呟く。

「やたら増田の肩持つんだな」

仁はふつと笑う。

「別に肩なんて持ってたねーよ。ボクも気持ちかわからねーってわけじゃないしな」

「もしかして、前の学校でヤンキーだった？」

冗談まじりの仁。

夏希はウザったい目を仁に向ける。

「冗談だよ、冗談！ お前がヤンキーなんて思ってたねーよ」

否定する仁に、深々と椅子に腰を掛けた夏希。

「そういえば、ずっと気になってることがあるんだけど…」

夏希はウザったい目から興味津々の目になる。

「なんだよ？」

「今竹って子のことなんだけど、いつ性同一性障害って知ったんだよ？」

まだ美夕に声をかけられていない夏希は、少しでも美夕のことを知っておこうと思ったのだ。

「噂だ。今竹と同じ中学の奴らが、“今竹は性同一性障害だ”って言ってたんだ。それが大きく噂になってな。今竹と同じ中学の奴らが、“男女でキモイ”って言ってたんだ」

「キモイって…そいつらのほうがよっぽどキモイぜ」

ボソツと呟く夏希に、苦笑する仁。

「で、いつ頃の話だよ？」

「一学期の四月下旬にその噂が流れたんだ。ゴールデンウィーク後にクラスで性同一性障害について話し合ったんだ。今竹に話を聞いてな。今竹は泣きそうな顔してたけど…」

仁はその時のことを思い出したのか、胸を痛めた。

（“男女でキモイ” そんなことを言う奴がいるんだな）
他人に理解してもらえない辛さを痛感した夏希だった。

「今竹のこと聞いて友達になりてーのかよ？」

「あ、いや、そいうわけでは…」

慌てて自分の心の中にある気持ちを隠して否定した夏希。

そんな夏希の気持ちを見透かしたのか、

「素直になれよ。アイツ、このクラスで友達一人もいねーみたいだし、お前が友達になったら喜ぶと思うぜ？」

仁はアドバイスした。

「仁…」

目を丸くする夏希。

夏希がアドバイスされたことは転入してきて以来、初めてなのだ。

夏希がアドバイスを受けたのは、小五の秋以来だ。

「仁って呼び捨てにしたなっ！　じゃあ、オレも夏希って呼ぶな」

「好きなように…」

夏希がそう言うと、三限目始まりのチャイムが鳴った。

その日の放課後、夏希は一階の奥にあるコンピューター室に向かった。

目的はサイトを見るためだ。

今日の昼休みに、仁から“家のパソコンでサイトを見てる”っていう話を聞いて、家にパソコンがない夏希はコンピューター室に直行したのだ。

本当は仁にもついてきて欲しかったのだが、“バイトがある”と言われてしまい、やむを得ず一人で来たのである。

夏希が恐る恐るコンピューター室に入ると、生徒が十人程いる。

一番前の左の方に座り、コンピューターを立ち上げる。

その間、コンピューター室を見渡す。

今日、初めてコンピューター室に足を踏み入れた夏希にとっては、ドキドキ感がある。

こうして初めて行く場所は、夏希には新鮮なのだ。

コンピューターが立ち上げると、色んなサイトを見ていく。

芸能情報や占いやゲーム、流行っているテレビ番組などを見て回る。

夏希がチャットをやるうとしたその時、

「…赤谷…さん…？」

背後から小さな女子の声がした。

夏希が振り替えると、美夕が立っていた。

「あ…」

思いがけない出来事に驚いてしまう夏希。

どうしても、美夕に声をかけられなかったのに、美夕は糸も簡単に夏希に声をかけてきたからだ。

「…隣いい？」

美夕の問いかけに頷く夏希。

まるで好きな人に会った様な気分だ。

「コンピューター室に入る赤谷さんを見かけたんだ。コンピューター室の前でためらったんだけど声をかけたんだ」

美夕は夏希の目をまっすぐ見て言った。

「でも、なんでボクに声なんかかけた？」

「赤谷さんを初めて見た瞬間、オレに似ているって思ったから…」

「それでか…。ボクも声かけようって迷ってたんだ」

夏希はコンピューターのことなど忘れている。

教師用のコンピューターの前に座っている三十代半ばの男性教師が、二人のほうをジロツと見ている。

「場所変えよう」

夏希はそう言うと、コンピューターの電源を切り、カバンを持って立ち上がる。

二人はコンピューター室を出ると、屋上に向かった。

外は心地よいくらいの風が吹いている。

少しの間、二人の間に沈黙が流れる。

「オレのこと、原口や永井とか他の奴から聞いたたる？」

美夕は夏希を背にして聞いてくる。

「ああ…大抵のことは仁に聞いたよ」

「仁…？」

美夕はわけがわからないという表情で振り返る。

夏希と仁が下名前同士で呼び合うほどの仲になっているとは知らない

いからだ。

「原口とそんなに仲良いつてわけだ？」

「まあな」

「もしかして、付き合ってたんのか？」

「まさか…。付き合ってたなんかいいよ」

首を振り否定する夏希。

否定する夏希を見て、安心したのか、美夕はホッとした表情になった。

「そっか。オレが性同一性障害だってことはいつ知った？」

「今日。仁が教えてくれたよ」

そう言っていると、夏希はフェンスに腰をかけた。

「いつから自分は他人と違うって気付いたんだよ？」

一番気になることを聞いてみる夏希。

「小学校に上がる前。幼い頃からスカートとかピンクや赤の服とか女の子っぽい服装を着させられるのが、ずっと嫌だった。兄貴と一緒に虫取りや野球をしても、母親から言われるのはいつも“女の子らしい遊びをしないさ”ばかり。大きくなるにつれ、女らしい体つきになるのが嫌で嫌でたまらなかった。オレは男なのに…。男になりたいのに…。自分の性について矛盾を感じながら今日まで生きてきた」

美夕はフェンスを強く握って語る。

美夕の気持ちは、夏希にも痛い程わかった。

「同じ中学の奴らが性同一性障害だって知ってて言いふらしたみてーだけど、カミングアウトしたのか？」

「中一の秋にな。それからだよ、“キモイ”って言われるようになったのは…」

「そうだったのか…」

話は大体わかったという表情をする夏希。

「ボク、君と友達になりたいんだ」

「いいよ。オレも友達になりたい。そう思ってたところだしな」

「なんて呼んだらいい？　ボクは夏希でいい」

美夕は少し考えると、

「“今竹”って名字で呼んでくれ。下の名前で呼ばれるのは気が引けるからな」

「友達になるのに、名字っておかしくねーか？」

「じゃあ、特別に“美夕”でいいさ。“美夕”って名前、好きじゃねーけど…」

美夕がそう言うのに、ふっと笑う夏希。

「なんだよ？　おかしいか？」

「いいや。自分の下の名前、好きじゃねーっていう奴、初めてだ」

「まあ、普通はそんな奴いねーよな。でも、オレの場合は別なだけ。親もオレがこんな風になるとは知らずに、“美夕”なんて女の子の名前つけたもんだ。どうせなら男女通用する名前が良かった」

美夕の本音に、妙に納得してしまう夏希。

「このこと、親は知ってるのか？」

「うん、知ってる。親は落ち込んでたけどな」

美夕の脳裏には、両親にカミングアウトした時のことが浮かんでいた。

「今日はこの辺にして、これからもうろしくなっ！」

夏希は右手を出した。

「こちらこそ」

今日、美夕は初めての笑顔を見せてくれた。

中庭に置かれた死体

翌日の朝、いつも遅刻ギリギリの夏希が学校に着くと、校内が騒がしかった。

なぜ、こんなに騒がしいのかわからず教室へと向かう途中、仁と会った。

「おはよう、仁。なんか、騒がしくねーか？」

夏希は開口一番仁に聞いた。

「実は永井が殺されたんだ」

仁の言葉に、えっという表情をした。

「どこで？」

「中庭だよ。掃除のおばちゃんが第一発見者らしいぜ。夏希が来る少し前に警察が来て、現場検証してるぜ」

「大体の話はわかった」

「とにかく、教室行こうぜ」

仁が促すと、二人は教室のほうへと歩き出す。

すぐに江美が教室に入ってきた。

「すでにみんなも知ってると思うけど、永井君が何者かに殺害され亡くなりました」

「永井の代わりの学級委員はどうするんだよ？」

クラスの一人の男子が、江美に聞く。

「とりあえずは学級委員不在ってことにしておくわ。落ち着いたらゆっくりと決めようと思っています」

江美の目には涙が浮かんでいる。

自分のクラスの有能な生徒が亡くなった、と思っているに違いない。そこにドアが軽く二回叩く音がした。

江美は小さくはい、と返事をする、ドアに駆け寄り開けた。

「泉警察署の警部の瀬川です。こちらが村木巡査長です」

二人の警察関係者が警察手帳を見せ、江美に言った。

紹介され、江美は軽く頭を下げた。

「担任の河村です。中へどうぞ」

二人の警官を教室の中へ入れ、教壇に立った。

そして、生徒にもう一度、自分達の名前を告げ、クラスのことを聞く体勢になった。

「校長先生からお聞きしましたが、殺害された永井君は成績優秀で、このクラスの学級委員であり、生徒会にも所属していたらしいですね。どういう生徒でしたか？」

瀬川警部が優しい口調で、前に座っている女子生徒に聞く。

「クラスのまとめ役で、とても真面目でした」

恐る恐る、答える女子生徒。

「そうですか。誰かに恨まれるなんてことはなかったです？ 例え、このクラスや他のクラスの生徒と口論していた、とかそういうことで構いませんが……」

次にその隣の男子生徒に聞くが、その男子生徒は少し答えにくそうな表情をした。

瀬川警部は男子生徒の表情に、敏感に反応した。

「何かあるのですね？」

瀬川警部の問いに、男子生徒はそのままの表情で曖昧に首を縦に振った。

「それは誰ですか？」

黙ったままで答えようとはしない男子生徒。

「言ってもらったほうがありがたいんですけどね。まあ、それは全員に個別にお伺いします」

生徒の心情を察してか、これ以上、追求することをやめた瀬川警部。
「このクラスは全員何人いるんですか？」

村木巡査長が江美に聞く。

「男子が永井君を入れて二十五人、女子が十五人です」

「男子が多いんですね」

「元は男子校だったもんで……。八年前に共学になったんです」

「そうですか」

そう言いながら、村木巡查長が手帳に書き込む。

「では、これから個別に話をお聞きしたいのですが、どこか教室をお借りすることは…？」

瀬川警部は江美に聞く。

江美は少し考えてから、

「音楽室なら空いてます」

「じゃあ、二、三人のグループで話をお聞きます」

瀬川警部は全員の顔をしっかりと見て言った。

それから、友達同士二、三人で順に音楽室へと向かうことになっている。

当然、夏希は仁と美夕とで話を聞かれることになっている。

そして、午前十時過ぎ、夏希達三人は呼ばれ、音楽室に向かった。

「長い時間、お待たせしてすいませんな。こちらに座って下さい」

瀬川警部は夏希達に笑って言うてくれた。

三人が椅子に腰を掛けると、名簿が目に入った。

（名簿を見ながら色々聞いてるんだな）

そう直感した夏希。

「では、早速ですがお名前を教えて下さい」

三人が名前を告げると、村木巡查長が手帳に書いている。

「赤谷さんは先週の月曜日にこの学校に転入してきたのだとかで…。
前の学校はどんな学校だったんですか？」

瀬川警部の事件とは関係のない質問に、内心ガツクリする夏希。

こういう質問をして、気を楽にしてもらおうという配慮なのだろう。
「単位制の学校で、音楽の勉強をしていました」

「ほう…。音楽とはどんな？」

「バンドです」

「どこを担当していたんですか？」

「ギターです」

「ギターですか。村木君もギターをやっていたんですよ」

瀬川警部は村木巡査長のほうをチラツと見て言った。

「そうなんです。高校の時、バイトでお金を貯めてギターを買ってやってみました」

村木巡査長は白い歯をチラツと見せて言った。

「他に何か楽器はやってたんですか？」

「ドラムとピアノです」

「そんなに…？ そんなに楽器が出来て凄いすな」

瀬川警部は自分が何も楽器が出来ないせいか、うらやましそうな表情を夏希に向けた。

「では、本題に入ります。先程の男子生徒が、増田という男子生徒と永井君が口論になっていた、とお聞きしたのですが、実際のところはどうかたんですか？」

「口論というか、増田が文句ばかり言うもんで、永井がなだめたり注意してただけです」

仁が代表で答える。

「文句とはどういった感じですか？」

「ついこの前の音楽の授業での出来事なんですけど、増田が“合唱コンで歌う曲が嫌だ。合唱コンなんて出ない”って言い出して、一度、授業が中断したんです」

続けて、仁が答える。

「その時の永井君の対応っていうのは…？」

「“みんなで歌わないと意味がない”みたいなことを言っていました。仁はあの時のことを思い出しながら答えている。

「それで終わりですか？」

「いや…。増田が“オレは学級委員のお前の言うことなんて聞か

い”とかなんとかで、永井がカチンときて、増田の胸ぐらをつかんだってわけですよ。さすがにそこまでくると先生が止めに入ったんですけどね」

苦笑しながら言う仁。

「では、増田という生徒には動機があるってわけですよね？」

村木巡査長は夏希達に同意を求めるが、三人はなんと答えずにそのような表情をする。

「増田君はどんな生徒ですか？」

「オレのクラスのヤンキーだよ。茶髪でシャツの第二ボタンを開けてるイカツイ奴だよ」

次に美夕が答える。

美夕が自分のことを“オレ”と言っているのには、二人の警官も驚いた。

「オレって…女性ですよね…？」

「外見上は…。性同一性障害ですから…」

美夕の答えに、なぜ自分のことを“オレ”と呼んでいたか、二人の警官は納得した表情になった。

「話は戻しますが、茶髪のイカツイのが増田という生徒なんですね？」

三人に確認するように聞く瀬川警部。

「もしかして、前から二つ目の席の生徒ですか？」

村木巡査長は思い出したように聞いてくる。

「はい、そうです」

「それにしても、どの時代にも不良はいるんですな」

そう言いながら、瀬川警部は立ち上がりピアノのほうに近付いた。

「いや、実はね、僕の小学校から一緒の友人が不良だったもんでね。中学まではそんなことなかったんだが、高校に入ると不良グループに入ってしまったって…。両親や先生に反抗的な態度を取り、バイクで暴走したり万引きや人の家のガラスを割ったり…ついには少年院送りになってしまったんです。高校一年の秋に中退、高校での友人は

誰一人もいなかった。でも、唯一、僕にだけは心を開いてくれましたね。しかし、友人は僕が大学入学する頃に、実父に殺害されたんですよ」

瀬川警部は少し顔を歪めた。

「ナイフで十数カ所をメツタ刺しですよ。家庭内暴力をしていた友人を止めるのにナイフで刺してしまっただですよ。その時、僕は決意したんです。家庭内暴力をなくしていきたくから警官になろうって……。こうして、弁護士を捨てて、警官になったってわけですよ。まあ、今のこの時代も家庭内暴力での事件は絶えないですけどね」

瀬川警部は自分の過去の話をしてくれる。

「すいません、関係ない話をしちゃって……」

瀬川警部は笑顔になりながら、自分の席に座っていた席に戻る。

「いやいや……。ところで永井の殺害時刻ってのは……？」

仁は一番気になっていたことを聞いた。

「昨日の放課後で、午後五時前後です。殺害現場はまだ特定は出来ていませんが、今日の午前七時半に中庭に永井君の死体を破棄した」

村木巡査長は手帳の前のページを見て答えた。

「……ていうことは、殺害現場は中庭以外の場所ですよ？」

夏希の質問に、

「そうです。犯人は一晚どこかに死体を隠し持っていたってことです」

「でも、なんで七時半に死体を破棄したってわかるんだよ？」

美夕は腕を組み、二人の警官に聞いた。

「七時に掃除婦さんが通りかかった時には何もなかったそうなんです。仕事着に着替えて、再度、中庭を通った時に死体を見つけたんです。その時間が七時半なんです」

村木巡査長は三人に答える。

「それにしても、警察が到着したのって遅くねーか？」

警察の到着に嫌味のように言う美夕。

そんな美夕の言い方に、苦笑する二人の警官。

「我々も早く到着したかったんだが、なにぶん通勤通学ラッシュで遅くなっただよ」

少々、焦り気味で答える瀬川警部。

それなら仕方ないか、というふうな表情をする美夕。

「でも、なんで犯人は一晩も永井の死体を持つてたんだろう？」

夏希はポツリと独り言のように呟いた。

「確かに。それになんで永井が殺害されねーといけないんだ？」

仁は和夫の死に疑問を持つ。

「永井君は恨まれる生徒ではなかったんですよ？」

「はい。友達も多かったしな。なんだかんだ言ってみんな、永井に頼ってたからな」

「凶器って見つかったんですか？」

「まだです。恐らく、犯人が持つているか、どこかに捨てたかのどちらかでしょう」

村木巡査長は会議で上司に質問されて答えてるような口調で答えた。
「これはみなさんにお伺いしているのですが、永井君が殺害時刻である昨日の午後五時前後はどちらに…？」

「ボクは美夕と二人で学校の屋上で話をしていました」

夏希ははつきりとした口調で答える。

「何の話をされていたんですか？」

瀬川警部の夏希と美夕の話の内容が気になるといふふうな表情を見て、

（警察って深いところをつくんだな…）

ため息をつき思った夏希。

「美夕の相談にのってただけだよ」

「相談…ですか？」

「ああ…。内容は言いたくないけど…」

夏希の答えに困ったなという表情をする二人の警官だったが、どこにでもあるありきたりな高校生の相談事だと解釈した。

「原口君は？」

「オレは五時からバイトだったんで、バイト先にいました」

「どこでバイトを…？」

「駅前のレストランです」

「そうですね。わかりました。今日のところはこの辺で…。長々と
すいません」

瀬川警部は手帳を机に置いてから言った。

三人はやっと解放されたという気持ちになった。

夏希のクラス全員の事情聴取が終わったのは、午後十二時を少し回
ったところだった。

二人の警官が教室に戻ってくると、義隆にもう少し話を聞きたいと
いうことで、警察に連れていかれた。

そのことはあつという間に校内の噂となって流れた。

夏希の学年では、“増田ならやりかねない”とか“増田が絶対に犯
人だ”という意見が多いのは事情だ。

しかし、夏希だけは義隆のことを完全に犯人だと疑っていないかった。
何しろ、義隆が犯人だという確かな証拠がない。

ただ単に義隆と和夫があまり仲が良くない、衝突が多いだけである。
それだけで和夫を殺害した犯人だというのは無理がある。

確かな証拠がなければ、義隆が犯人だと言い切れない。
仁からその噂を聞いた夏希はそう思っていた。

和夫の死体発見の翌日、夏希の高校では校長が全校集会を開き、四
日間、学校を休校にするということを全校生徒に伝えた。

それと、合宿コンクールは中間テストが終わって五日後に日をずら
すとも伝えられた。

「明日から四日間休みかあ…」

駅前のファーストフード店で仁がハンバーガーを頬張りながら言った。

「永井があんな状態で発見されたんだから仕方ねーって…」

夏希はハンバーガー片手に、ウーロン茶を飲んでから言った。

「まあな。昨日、増田が警察に連れていかれてそのままだし、どうなってるんだろうな」

何気に義隆を気にする仁。

今日、義隆は学校に来なかったため、まだ警察の取り調べを受けていると思われる。

そのせいか、昨日の噂が延長のようにされた。

「とりあえず、一旦、釈放されてるだろ。一度、家に戻って、明日また来いって感じたと思うぜ」

「そっか。なんとか、犯人が見つければな」

仁の口調からも義隆が犯人だとは言い切れないと考えているようだった。

「増田が犯人だとは言い切れねーよな…」

「それはな。まっ、警察がなんとかしてくれるだろう」

仁は椅子に深くもたれかかりながら言う。

（なんとかしてくれればいいけど、あの二人じゃな…）

白髪まじりの穏やか口調で話す瀬川警部と、細身で長身な村木巡査長を思い出しながら、夏希はため息をつく。

「そんな深刻な顔すんなって！　なるようにしかないんだしさ」

仁はそう言うと、コーラを一気に飲み干した。

（全くお気楽なもんだ…。同じクラスメートが犯人だと疑われてんの…）

夏希はハンバーガーを頬張りつつ、ぼんやりと思う。

「これからどうなるんだろうな」

「何がだよ？」

夏希の真剣な表情に、キョトンとする仁。

「学級委員の永井が死んで、ボクらのクラスは大丈夫なのかなって……。それに、次の犠牲者が出ないかって心配になってな」

「大丈夫だろ。オレらのクラスは言うほどヤワなクラスじゃねーよ。担任の河村を見てるとそうだろ？」

仁の答えに、納得してしまう夏希。

夏希が転入してきて以来、妙に江美のプライドが高いのがどうも気になっていたのだ。

言い方がキツイ上に、生徒に嫌なことを言われるとすぐに怒る。

そして、男子生徒と女子生徒の態度が違う。

男子生徒には、自分の若さをアピールして色目を使って話す。

女子生徒には、同じ同性なのか目の敵にしている感じなのだ。

夏希は江美のことが気になっていた。

「それに、次の犠牲者は出ないだろ」

「絶対には言い切れねーだろ？」

「まあな。どうなるかわかんねーよ」

仁は頬づえをつく。

「そうだけど……。それに、河村って男子に色目を使うのが気になる」
仁に聞こえないように呟いた夏希だったが、仁にはしっかりと聞こえていた。

「ずっとそうだ。兄貴や兄貴の先輩の時からそうだ」

「河村って教師何年目？」「今年で七年目で、二十九歳。小学生の時から理数系が得意だったらしいぜ」

「なるほど。それで、数学教師になったのか」

夏希は自分と同じ高校の制服を着た女子生徒が二人歩いているのを、窓越しに見ながら言った。

「とにかく、このことは忘れようぜ！」

仁は事件の話はこれでおしまいだという口調で、夏希に言った。

夏希の挑戦

四日間の休校が終わり、翌週の月曜日、校内は和夫のことが気になりつつも平常心を取り戻していた。

夏希のクラスでは、和夫の席に花が手向けられていて、どこかポツンとしていて淋しい気分であつた。

義隆のほうは犯人だというのには証拠が不十分のため釈放されて、当分の間、無期限の停学となつた、と江美からクラス全員に伝えられた。

「増田、二度目の停学だ。あともう一回停学になるとヤバイぜ」
美夕がカレーライスを食べながら言う。

珍しく、夏希は仁と美夕の三人で学食で昼食をすることにした。

「三回停学になるとどうなるんだよ？」

「お前、知らねーのかよ？ 停学は三回まで。つまり四回目の停学で退学処分になるんだ」

「そりゃあ、ヤバイわ…」

夏希は他人事のように言う。

「一年で二回も停学になる奴なんていねーよな。残りの二年半、大人しく過ごすことだな」

「それはな。一学期の時は十日間の停学だったな。あの時はクラス全員が大喜びだったような気がするけど…」

美夕は思い出したように言う。

「増田はほぼ全員にからんでたからな。停学が終わってたからはそんなことはないけどさ」

「からんでたつて…？」

「要するにいちやもんつけてたんだ」

「いちやもんねえ…」

（確かに増田なら言いそうなことだ）

「河村には言つてなかったぜ。増田も河村のプライドの高いとこ知

つてたから言うに言えなかったんだろうな」

仁はそう言つとトレーを持ち上げ立ち上がった。

「待てよ」

美夕もトレーを持ち、仁の後を追いかける。

夏希も慌てて美夕の後ろに金魚のフンのようにつく。

最近、仁と美夕が仲良くなつてから、自分が取り残されている気持ちになる夏希。

まだ打ち解けていないというのもある。

転入生はクラスと馴染むのが遅い分、苦労するな、と二人の後ろ姿を見ながら思っていた。

それから、美夕が職員室に行かなくちゃいけないとのことで、夏希と仁は屋上へと向かった。

「はい、キャンディ」

夏希はブレザーのポケットからオレンジ味のアメを二つ取り出し、一つを仁に手渡した。

「ありがとう」

仁は夏希からキャンディを受け取り、口の中に頬張る。

「今日、天気いいな。昨日、雨だったのに…」

仁の言葉に、返事する夏希。

二人の間に少しの沈黙が流れる。

「なあ、夏希…」

「あん？」

「聞きたいことがあるんだけど…」

「なんだよ？」

仁の心の内がわからないという表情をする夏希。

「なんで自分のこと“ボク”って呼ぶんだ？」

今までない真剣な表情で聞いてくる仁に、拍子抜けしてしまう夏希。しかし、言わないといけない時期がきたんだ、と直感的に思ってしまった夏希。

「ずっと言つてなかったけど、ボクも美夕と一緒にで性同一性障害な

んだ。別に隠してるつもりはなかった」

夏希は仁の目をまっすぐに見つめて答えた。

「そっか…。そんな気がしてた」

仁の意外な反応に驚く夏希。

仁は何も知らない、そう思っていたからだ。

「クラスみんなが今竹と友達になろうとしなかったのに、唯一、転入してきた夏希だけが友達になりたそうだったからな。それに、

“ボク”って呼んだり話し方が男っぽかったから、もしかして…って思ったんだ」

仁は時折、切なそうな表情をさせながら言った。

「クラスに性同一性障害の人間が二人いるってどういう感じだ？」

夏希の問いに、仁はしばし考えてから、

「なんか変な感じだな。今までに経験したことのない気分。本当は女子だけど、男子のようなもんだもんな」

さつきとは違う笑顔で答えた。

「そう言われるとそうだな」

「このことは河村は知ってるのか？」

「うん。編入手続きの時に話した。驚いてたけどな。その驚きも転入初日に仁が美夕のことを言ってくれたおかげで、驚いてた原因がわかったからな」

夏希は自分より十五cm高い仁をチラッと見上げて答えた。

「へえ…。おっ、そろそろ昼休み終わるし、教室に戻ろうぜ」

仁はそう言つと歩き出す。

仁の歩き出した後ろ姿を見つめ、改めて自分が性同一性障害なんだということに気付き、仁に理解されて良かったという思いが駆け巡った。

翌日の朝、夏希は仁と一緒に学校へ登校することになり、学校の最寄り駅で待ち合わせをした。

いつもより一時間も早く起きた夏希は、眠い目をこすり改札口で仁を待つ。

夏希が駅に着いて、約五分、仁はやって来た。

「遅くなってスマン」

「ああ…いいよ。行こうぜ」

「眠そうだな」

仁は夏希をからかいながら言う。

「いつもより早く起きたからな。絶対、授業中寝てしまっし…」

アクビをした後に言う夏希。

「普段でも授業中に寝てんじゃないか」

「どっちでも同じってわけだ」

そんな会話を交わしながら、学校までの約十分の道のりを歩く二人。実はというと、昨日の昼休みが終わってから、夏希の担任である江美の姿が見当たらないのだ。

江美の荷物だけはあるのに、どこに行ったんだろうと校内が騒がしくなった。

校長や教頭も真面目で勝手に姿を消すということはないと言っていたが、夏希もそう思っていた。

和夫の事件も解決していないため、江美がどこに行ったのか心配されているのだ。

夏希と仁が教室に着くと、前に来た二人の警官と教頭が教室にいた。二人は教頭に挨拶をすると、そそくさと自分の席へと着席する。

（永井のことか河村のこと、どちらかな）

夏希はそう思うが、八時半のチャイムが鳴る時刻にクラス全員がぞくぞくと教室に入ってきた表情は驚いているのは確かである。

八時半のチャイムが鳴り終わるとすぐに教頭が口を開いた。

「今日はみんなに伝えないといけないことがあります。河村先生が音楽室で死体となって発見されました」

教頭の衝撃的な告白にクラス全員が息を飲んだ。

「それで警察の方がみんなに聞きたいことがあるそうです。質問には正直に答えるように」

教頭はそう伝えると、瀬川警部に目をやった。

瀬川警部は前に出ると、

「教頭先生がおっしゃったように、河村先生が何者かによって殺害されました。昨日の昼休みの後に河村先生の姿が見当たらないというのですが、誰か河村先生を見たという人はいませんか？」

クラス全員に見ながら聞いた。

だが、クラス全員は首を横に振った。

「そうですか。職員室でお弁当を食べた後に“トイレに行く”と隣のクラスの担任に言ったそうなんですが、トイレに行った形跡がないんです」

困った表情の瀬川警部。

「あの…凶器ってなんなんですか？」

夏希は勇気を出して聞いてみた。

「ナイフで何カ所も刺されて亡くなっていました」

村木巡查長が夏希じゃなくクラス全員に答えた。

「永井と一緒に一晩どこかに死体を置いてたのか？」

これも夏希の質問だ。

「恐らくそうでしょう」

「第一発見者は？」

「二年の女子です。その女子が合唱コンクールの朝練を友達五人でやろうとして音楽室に入ったら、河村先生が倒れていた、というところですよ」

続けて、村木巡查長が答える。

「ナイフや殺害時刻とかどうなってるんだよ？ それに、永井のこともどうなってるんだよ？」質問の多い夏希に参ってしまう二人の

警官。

そんな二人の警官の表情を読み取った教頭は、

「そんなに一気に質問しなくても…。一つずつしなさい」

夏希に注意をする。

教頭に注意された夏希は、ちえつと舌打ちをし、不機嫌そうな表情をした。

「凶器のナイフはまだ発見されていません。殺害時刻もまだわかっていません」

瀬川警部の答えに、

（またなのかよ？

全く何やってんだよ？

警察ってのは役立

たねーよなあ…）

椅子に深くもたれかかり、腕を組んで、二人の警官を見つめてそう思っていた。

「今回はこの前みたいに事情聴取はしませんが、何かあれば、先生まで言つて下さい」

瀬川警部がそう言い、教頭と共に教室を出て行くとする二人の警官に、

「ちよつと待てよ！」

夏希は呼び止めた。

「どうしたんだ？

何か思い出したのか？」

教頭は振り返り、夏希の方を見る。

「ボクがこの事件解決してやるよ」

夏希の言葉に、クラス全員が夏希のほうを見た。

「な、何言ってるんだね？ 君が事件解決したら警察はいらないじゃないか！？」

あたふたする教頭。

夏希は立ち上がり、

「ボクは警察と違って、頭が違うからな」

そう言いながら、自分の頭を指差した夏希。

「君には事件を解決するのは無理だ」

村木巡查長が言う。

「それはどうかな？　警察がなんと言おうとボクは必ず事件を解決してみせる」

強気の夏希に、悔しそうな村木巡查長。

「別に構わないが、万が一、事件解決まで至らないと何か処分してもらおう。それでいいかな？　赤谷さん？」

「ああ…退学でも停学でもなんでもしたらいいじゃねーか。ボクには失うものなんて何もないからな」

瀬川警部の挑戦に受けてたった夏希。

クラス中がざわめきだす。

「警部、そんなこと言っていていいんですか？」

村木巡查長は少し戸惑いながら瀬川警部に聞く。

「大丈夫。女子高生に事件なんか解決出来ないからな」

夏希に聞こえないように瀬川警部は言った。

その日の昼休み、グラウンドに出た夏希と仁。

仁は朝の夏希が言ったことに驚いている。

「なあ、夏希」

仁は夏希の五歩後ろに歩き、夏希に声をかける。

「なんだよ？」

前を向いたままの夏希。

「“あんなこと”言っていていいのかよ？」

「“あんなこと”って…？」

「事件を解決するってことだよ。クラス全員、お前に期待してんぞ！？」

仁は頭を掻き言う。

夏希は足をピタツと止め、仁の方を見る。
それに合わせ、仁も足を止める。

「そんなに事件のこと知りてーか？」

「当たり前じゃねーか」

「じゃあ、仁に一つやってもらいたいことがある」
「やってもらいたいこと…？」

仁は何をやられるのかと不安げな表情をする。

「この校内で死体を隠せそうな場所を調べて欲しい。今わかるなら教えて欲しいんだけど…」

「OK！ 今日の放課後調べるよ」

「わかった。…ていうか、なんでボくらグラウンドに来てんだ？」
夏希はわけがわからないという口調で聞く。

「知らねーよ。オレはただ夏希についてきただけで…」
仁がそう言うのと、二人は笑いあう。

「ハハハ…なんか、わけわけんねーよな」

「うん。まあ、とりあえず、事件のことをなんとかしねーとな」

「まあな。事件解決しねーとヤバいしな」

夏希は瀬川警部と交わした約束を思い出していた。

「そつえば…。しかし、警察も酷いこと言うんだな。被害者が二人も出てるのにさ」

仁は頬を膨らませる。

「あれはボクが“事件解決する”って言ったからな」

「でも、夏希が強気なこと言うなんて思わなかったぜ。“ボクには失うものなんて何もない”とか“頭が違う”とか…」

夏希が言ったことを思い出しながら言う仁。

「警察の捜査が遅いからだよ。永井のことだって全くだし、一体どうなってんだ？って思ってた挑戦的なことを言ったんだよ」

「どうやって事件解決する気だよ？」

「大体、決まってるんだけど具体的には…」

なんとも答えにくそうな答え方をする夏希。

そんな夏希を見て、あまり追及しないでおいこうと思った仁。

「ふーん…。夏希がどう考えてるかわからねーけど、くれぐれも無茶だけはしないでくれよ」

仁は夏希に忠告する。

「大丈夫だつて。ボクは何があつても強気でいくから」

「…ならいいけど。教室に戻ろうぜ！ 五限目は音楽だ」

「オウ！！」

二人は校舎へと戻っていく。

しかし、夏希は事件のことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1523y/>

合唱コンクール殺人事件

2011年11月17日20時42分発行